

六花



RIKWA

5

俳句雑誌りつか

2016 (平成28年)
cover design Yuna Mizuno

山田六甲

明石大門

印

竜天に登りたる日のうねり橋
野島崎けぶらしてゐる百千鳥
青葉して車行き交ふ空の橋
ひむかしの青葉風なる大門かな
よく晴れて播磨が灘の夏霞
鷹化して天蚕糸絡まる鳩の足
海へ庭開かれてあり著莪の花
遍路笠あらばこの潮渡らんか
帆を白く明石大門の鱭舟

春惜しむ天下為公の刻み石
松の花孫中山のころざし
鯉のぼり流しありたる丘の上
青葉して速潮に舟あへぎけり
逆潮に舟はあらがひ夏きざす
郭公を聞かばや移情閣の庭
春尽きて竜舌蘭は舌切られ
玫瑰に次の蒼のふくらめる

父の里緑を散らす水車かな
新緑や雨の由布岳まのあたり
新緑や野辺に積まれし吉野杉
かづら橋緑の風の吹き上ぐる
牧に出て緑の駒となりにけり
風青しかざしみる手に血の通ひ
緑さすLP盤に聴くアリア
緑さす窓に産声透り来る
新緑の母の生まれし家染まる
機嫌よき父の小言やみどりの夜

菜箸の長さちぐはぐ芹茹でる

松本文一郎

さいばしのながさちぐはぐせりゆでる まつもとぶんいちろう

鉛筆の芯丸まりし余寒かな

春を呼ぶ寛永堂の和菓子かな

黄水仙主亡きとて律義にも

菜箸の長さちぐはぐ芹茹でる

春一番軒を鳴らして過ぎゆけり

芹をさつと熱湯に通すと鮮やかな緑と春の香りが立ち上る。茹ですぎると早春の香りどころか、しゃりしゃりとした歯触りまで失ってしまう。山菜料理に共通する秘訣。芹を熱湯にさつと入れたものの、気が付くと不揃いの菜箸だったが、芹を素早く茹でることへ気持ちは集中していたからだろう。それが「長さちぐはぐ」に出ている。不揃いの滑稽味と男料理であろう俳味を醸し出す暮らしの一場面。茹であげたら、晩酌がまっているのは目に見えている。最近の文一郎作品には飄逸さがにじみ出て味わい深い。

老木の洞の奥まで緑さす

佐津のぼる

老木の洞の奥まで緑さす

新緑の梢濡らせる滝しぶき

並べ売るすでに緑の植木かな

新緑や撤軌進まぬひとところ

新緑の山裾父母の墓どころ

ろうぼくのほらのおくまでみどりさす さつのぼる

緑さすとは「初夏の目覚めるような若葉のみどりをいう」と辞書にあるが、「さす」とは光が差す（射す）ことであり、緑が満ちること。新緑の明るい光が老木の洞の奥までさしているとの主観写生。洞をのぞき込んだわけではないが「洞の中まで」とするよりは、これだけ明るい緑の光だから中も緑の光で明るく満ちているであろう、推量断定したのだ。これこそ、のぼるの「六花で俳句を学び直す」と目指してきた俳句である。読者も緑の光に満ちた洞穴の中をのぞき込んでいような気分になろう。

雪卿集

新
緑

佐津のぼる

老木の洞の奥まで緑さす
新緑の梢濡らせる滝しぶき
並べ売るすでに緑の植木かな
新緑や撒軌進まぬひとところ
新緑の山裾父母の墓どころ

緑
さ
す

志方
章
子

新緑の楠公さんを拝みけり
緑さす一人遊びの嬰の上
新緑や瞑つむりて深呼吸
新緑の中より鳥の涌きたちぬ
新緑を被りて在す父母の墓

雪卿集

新
緑

永田万年青

新緑や等間隔に砂利の音
新緑の影を踏みつつ二人かな
縁側の昼餉の人に緑さす
新緑や葉先に玉の留まりぬ
新緑の杜を越えたる鳥一羽

春一番

出口

誠

春一番耳に当たりてぼぼと鳴る
春風を切りて自転車進みけり
新緑の縁側に子のじゃれあひぬ
新緑の山から出づる金の汽車
新緑の森の向うへ線路跡

雪卿集

余 寒

松本文一郎

鉛筆の芯丸まりし余寒かな
春を呼ぶ寛永堂の和菓子かな
黄水仙主亡きとて律義にも
菜箸の長さちぐはぐ芹茹でる
春一番軒を鳴らして過ぎゆけり

山毛櫟新樹

升田ヤス子

水音のぶなの新樹の裾にかな
新緑に果ての隠るる大吊橋
万緑の底ひにありぬたたら跡
湧き水の砂のこをどり新樹光
緑陰に炷す蕪村の母の墓

雪樹集

新
緑

藤生不二男

新緑や裸石神社の陰光る
新緑の風の中なる研師かな
緑さす賽の河原に水光り
新樹光墓石に影の揺れてをり
遠嶺まだ雪の残れる緑かな

日
の
光

赤松有馬守破天龍正義

新緑や檻褸靴で登る鉄拐山
日の光青葉の光受けてをり
万緑や嗚呼生きて来て良かったなあ
新緑の余呉を電車の過ぎゆけり
山河なるみどり眩しみゐたりけり

蛩雪譚

六甲選



二十八年五月号鑑賞

以前何かの番組でサルバドレ・ダリの弟子が「私が描いたダリ風の絵は専門鑑定家が見ても本物だと保証する」と豪語していた。が、彼はその後「自分がない」と嘆くようになる。自分を見失ったから。学ぶとは「真似ぶ」から始まるが、真似ぶが過ぎて抜けきれなくなつたとき、麻薬患者と同じ運命に。大事なものは真似ぶをいつ脱却するかである。真似ぶを脱して、その後は先達の骨法を学び、自ら独自の境地を切り開くこと。ただし、あくまでも趣味で楽しむのを前提とする人には関係ない。主宰のコピーがずらりと並ぶ俳句雑誌は気持ち悪い。

鉛筆の芯丸まりし余寒かな

松本文一郎

余寒とは寒が明けてもなお残る寒さで、寒中よりも寒く感じることもある。炬燵に入つて書き物ばかりして鉛筆の芯が丸くなつてしまった。作者自身も猫のように丸く縮こまっているのである。鉛筆の芯も人間も丸くなってゆく感覚が主宰にもある。

新緑や裸石神社の陰光る

藤生不二男

裸石神社には日子石神、日女石神つまり日子（ひこ・彦）日女（ひめ・姫）の形をした石が祭つてある。陰とは日影ではなく、女性の「陰（ほと）」のことで女性器の形をした石であろう。それが新緑の光に包まれているに違いない。もし濡れて光っているのなら卑猥である。この神社は神戸市西区神出にあり、雄岡山・雌岡山と墳墓のような二岡（陰陽）が並ぶ。古代の印南の東の端になる。この岡に立ち入れば古代の人の根に触れるような気がしてくる。

新緑や襜褕靴で登る鉄拐山

赤松有馬守破天龍正義

鉄拐山とは「摂津名所圖會」にある名所旧跡で芭蕉も是非登つてみたかった山。芭蕉の「蝸牛角ふりわけよ須磨明石」はこの山から見て詠んだにちがいない。山頂にゆくのにこの地の子の案内で登つえが藪で大変だったらしい。作者は鉄拐山の東麓に最近まで住んでいた。襜褕（ぼろ）という言葉も懐かしいが、主宰の子ども頃はみな襜褕靴かゴム草履であった。江戸時代は草鞋で登つたのだからその苦勞が偲ばれる。山頂に着けば展望すばらしく、正面の淡路島、左に茅渟の海、右に播磨灘から小豆島や屋島を一

望。天下を取つたような気分になる。しかし芭蕉はその気分を味わうべく登つたのではなく源平一ノ谷合戦を全貌回顧してみたかったのではないか。

遮るもの無き万緑の水鏡

廣畑 育子

水鏡とは水面が鏡のように凪いでいること。「水鏡」とは、神武天皇から仁明天皇まで57代の事跡を編年体で述べている書でもあるが、この句は水面を詠んだ万緑の清々しい光景。遮る物もなく、静かな水面を堪能しているのというだ。鏡そのものであるという言い切りも佳い。

